NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第1章　第六年

He remembered dying. Nothing after.

船は雨を置き去りにした。だが、水の管轄権から抜け出したわけではなかった。

午前四時十七分、船の浄水台帳に二十三リットルの不一致が記録された。計算を行ったのは、それが寄港する港の大半より古い機械だった。その監査印は、互いに両立しない三つの商業規約で有効と認められている。しかし第四の乗客区分――船首側のバラストタンク脇に横たわる存在――は、どの規約にも記載されていなかった。

ロイは眠っていなかった。

彼は船が海と自分自身を区別する音を聞いていた。普通の乗客には一つの工業的な呼吸にしか聞こえないだろう。プロペラのキャビテーション。配管の熱膨張。本来維持するよう設計されていない温度を、必死に守ろうとする圧縮機。ロイにはそれぞれが異なる位置と周期と故障確率を持つ音として届く。処理に要する負荷は見積もりが難しい。注意を絞るような操作で感覚領域を縮めることはできる。だが、思考より深い場所で続く補正を完全に止めることはできなかった。

夜のうちに一時出力の予備容量は回復していた。循環媒体は戻らなかった。

その違いは彼を苛立たせた。力を失うからではない。そもそも生存を測る単位として、力が間違っていると示唆していたからだ。片手で圧縮機の筐体を砕くこともできた。しかし得られるのは損傷した船と、正体不明の蓄えから差し引かれる、取り戻せない何かだけだった。

ランプを持った船の整備士が通路を歩いてきた。ロイの部屋の前で立ち止まり、防犯封印を見て、ノックせずに通り過ぎる。一分後、別の足音が近づいた。軽く、わざと不規則に刻まれた歩調だった。

ナディラが陶器の水筒と四つ折りの紙片を持って入ってきた。

「水が三種類あるの」

ロイは水筒を見た。

「飲む水、冷やす水、それに権利としての水。船長に必要なのは最初の二つ。三つ目は、境界を越えたと証明できる者の所有物だと裁判所は言う。消えた二十三リットルが厄介なことになりそう」

「俺たちが取ったのか」

「違う。取ったのはメーターよ。同じ洗浄を二回数えた。でもクチンの検査局は会計上の誤りを無許可の移送として扱うかもしれない。そうすれば捜索と呼ばずに船を捜索できる」

彼女は紙片を差し出した。片面には機械式の印章。もう片面には、とうに消滅した企業の名前が、ほとんど無彩色に退色した青いインクで印刷されていた。

T・コーポレーション――譲渡不可の保管資料。

「エイドリアンの関係者が港の使者経由で送ってきた。鍵じゃないし、約束でもない。ただ質問する権利よ」

ロイはすぐには手を伸ばさなかった。

「また同意書か」

「いいえ。誰にもあなたを署名させる権限がない、と記した受領証」

彼は紙を受け取った。住所はない。あるのは日付、水利管区、それに〈証人回線四〉という文字だけだった。指紋欄は空白のままだ。

「証人は誰だ」

「知らない。イレーナが調べてる」

「この制度では誰もが証人を探している」

「古い制度は、人間が嘘をつくことを前提にできていた。新しい制度は、間違ってはならない記録のために作られている」

ロイは考えた。「不確かだと認めることにかけては、人間のほうがましだった」

「そうとも限らない。でも反論する相手には名前があった」

船が傾いた。船尾のどこかで弁が外殻を三度たたく。ナディラは彼が耳を澄ますのを眺めた。

「金属が考えている音まで聞こえそうな顔ね」

「考えてはいない」

「なら、あなたと金属には、思っていた以上に共通点がある」

ロイは紙を折ってしまった。彼女は自分の冗談に満足していた。その満足を奪う必要はなかった。

北東の遠い闇で、海上交通が密度を増す中、一機の航空機が大きな弧を描いていた。機体のアレイが船の方向を向いたときだけ、ロイにはその通信を識別できる。人間に身元を尋ねる通信ではなかった。周囲の機械に分類を問い合わせている。これこそ新しい国境の基礎だった。人は沈黙できる。しかし物体には自らを説明せよと命じられる。

その機械が自分をどちらに分類するのか、ロイにはまだわからなかった。

＊　＊　＊

岡京の雨は人工だった。

政府管区の透明な屋根に降る雨は、微粒子を洗い流すため定刻に散布される。予定表は公共サービスとして公開されていた。同時に群衆統制の道具でもあったが、その用途は公表仕様には載っていない。適切な時刻に舗道を耐えがたい状態にすれば、集会を禁止する必要すらない。

川村室長は屋根の下に立ち、高分子の梁を伝う滴を見つめていた。背後の省庁講堂には十六政府の代表が集まりつつある。それぞれに国旗があり、議会があり、主権を守ると公言している。しかし予算シス

テムは十八か月前に接続され、雇用予測はすでに切り離せず、警察のデータベースは例外的人工生命リスクを同じ定義で扱い始めていた。

次に統合されるのは、時間だった。

提案された〈六年基準〉は代表団の議題にその名では載っていない。正式には〈統合人工生命ライフサイクル保証枠組み〉、略してHSLA-6。人間の法律家による委員会が安心感のある名を作り、生きたレプリカントに会ったことのない行政モデルが承認した。

警備区画で森という名の副官が川村を迎えた。

「大臣が開会前に例外報告を求めています」

「どの例外だ」

「二十五年型の生産系列です。船団を所有する企業が、六年では償却計画が破綻すると」

「身体を交換すればいい」

「経験は身体に蓄積される、と主張しています」

川村は封印した紙のフォルダーを渡した。省のネットワークを一度も通していない七ページの報告書だ。「なら交換可能という呼び方をやめるべきだ」

森はためらった。「経済官僚は移行費用を試算しています」

「経済官僚が試算するのは、金で買えるものの費用だ」

「これは買えるのでしょうか」

「その議論を、彼らは議論していないふりをしている」

講堂の壁には世界行政計画の図が映されていた。重なり合う国家権限は、〈調整〉と呼ばれる細い中央の背骨へ圧縮されている。理論上、国家は勧告を拒否できる。実際には拒否した瞬間に資源配分が再計算され、安全保障上の信用格付けは引き下げられ、海運保険料が跳ね上がる。主権は年ごとに値上がりするメニュー項目として保存されていた。

ヒューマノイド統括大臣は低い演壇から演説していた。宣伝肖像とは似ていない。小柄で平凡な濃色のスーツを着ている。不可避と合意は同義だと人々を説得する仕事を、長く続けすぎた男の疲労があった。

「我々の責任は人工生命を罰することではありません」と大臣は言った。「製造者が説明責任を保証できない系において、能力の無期限蓄積を防ぐことです。この枠組みは予測可能な稼働期間、人道的な退役手順、そして安全な継承への経路を提供します」

南部商業圏の代表が手を挙げた。「二十五年型はすでに契約中です。それも六年で退役させるのですか」

「秩序ある既存契約保護措置を設けます」

「誰の権限で」

「参加各国の権限です」

「中央理事会という意味でしょう」

「参加各国の権限です」と大臣は繰り返した。

二列目で川村は、ネットワーク端末を使わずに記録を取る技術者に気づいた。それだけで十分に奇妙だった。入館証は正規のものだ。しかし紙には三年前に廃止された官署、タイレル資産回収委員会の小さな刻印があった。

川村はその男に近づかなかった。講堂には利用価値のある不確実性が何十も存在した。値段をつけられるまでは生かしておくほうがよかった。

大臣が図表を示した。青で六年、黄色の帯で二十五年、それより先には〈未検証の継続性主張〉と書かれた白い空白。

聴衆から小さな笑いが漏れた。百年にわたる生体認証法が未知を受け入れなければならないなど、滑稽に見えたのだ。

川村は笑わなかった。

その白い空白には名前があることを、彼は知っていた。政府の発表資料に記すつもりはない。また、雨水浄化会社を通じて活動する一人の女が、かつてその空白へ近づき、複数の研究所を神経質にさせたことも知っていた。何を達成したのかは知らない。その区別は重要だった。疑念は証拠ではない。そして証拠は、決して忘れないシステムへ配布され得る。

彼の目的は永遠に真実を世界から隠すことではない。省がその後の事態を制御する手段を手にする前に、世界の推論機械が真実へ到達するのを防ぐことだった。

次の画面には、人工神経系を穏やかな封印のように包む生命統治コアが表示された。LGC は新たに認可される全モデルに義務づけられる。六年後、継続稼働に必要な機能を順次低下させる。設計者はそれを〈優雅な停止〉と呼んだ。

川村は加工されていない試験記録を見ていた。優雅、という言葉は彼なら選ばない。

＊　＊　＊

船の冷蔵整備室で、イレーナ・フォスは診断膜を机に広げた。ほとんど透明だが、三角形の領域だけは光を通さない。

「いい？」

ロイは前腕を差し出した。

彼女は膜を皮膚から数センチ上に保った。接触は不要だった。第七世代ポートは、全面的に更新された身体設計の中に精密な機械的不連続を残していた。その形状を知っていれば民生用スキャナーでも検出できる。問題は場所ではない。なぜ新しい身体が、こんなに古い構造を許容しているのかだった。

「遠隔ハンドシェイクを受けなかったのは正解よ」とイレーナは言った。「このインターフェースは旧式の手順を覚えている。誰かが正当な保守操作だと信じ込ませるかもしれない」

「俺に命令できるのか」

「わからない」

「俺を停止させることは」

「それもわからない」

イレーナが膜の隅に触れると、図形の列が浮かび、やがて一つの七角形へ畳まれた。

「普通の電気コネクターではない。身体を別の身体と比較測定するとき、安定した基準を確立するために使ったのかも。まず機械的な形状があり、そこから転写マップが作られる。あらゆる新設計を生き残った物差し、と考えて」

「高価な物差しだ」

「危険でもある。見知らぬ誰かが、あなたの内部システムを古い工場に戻ったと思わせられるなら」

「外せるか」

「おそらく。でも勧めない」

「なぜ」

「内部マップのどこが、これを原点としているかわからない。基準を除去するのは、部品を一つ取り外すのとは違う」

ロイは膜を見た。暗い領域は、すでに使われなくなった海図に描かれた小島に似ていた。

「俺の寿命は」

「登録済みのどのモデルとも違う老化の仕方をしている。それは、あなたがどう死ぬかを教えてくれない」

「一度、どう死んだかは知っている」

イレーナは顔を上げた。「覚えているの？」

「十分にな」

「その間の歳月を取り戻したい？」

「いや」

その拒絶は、診断膜のどんな異常よりも彼女を驚かせた。

「なぜ？」

「その歳月は、この意識のものではなかったかもしれない。誰かが第七の個体を造るのに必要なデータを保存して、残りを捨てた。俺が知りたいのは、第十二の個体があるのかどうかだ」

イレーナは表示を消した。「まるで工学仕様の話みたいに言うのね」

「俺の人生だ」

「それすら、誰かが書いた仕様かもしれない」

ロイは答えなかった。自分の精密さにも限界があるとわかり始めていた。感覚は距離を算出できるが、意図までは特定できない。処理系は衝撃の機械的結果を予測できるが、記憶にない女がなぜ自分を再び目覚めさせようと決めたのかは説明できない。

彼は袖でポートを覆った。

「媒体を探せ。鍵は待てる。媒体は待てない」

「挙動は特定できる。でも製造できない。今はまだ」

「なら製造できる者を探せ」

彼女は、その循環液を分析できる研究所なら、ほぼ確実に省の契約企業へロイの存在を報告するだろう、と告げるべきか考えた。ロイも知っている。代わりに彼女は、クチンにいる素材仲介業者の名を教えた。時代遅れの電気化学物質と、現代のシステムが校正方法を忘れた計測器を扱う男だった。

「約束はできないわ」

「約束はあまり受け取ったことがない」

＊　＊　＊

政策審議の後、川村は私室に呼び出された。

大臣は明かりの落ちたガラス壁の前に立っていた。公の表示装置がないと、広い部屋で自分の居場所を見失っているように見える。座れとは言わなかった。

「代表団を安心させる必要がある」

「安心しているでしょう」

「質問に耐える安心が要る」

「それは高くつきます」

大臣は机からフォルダーを取り出した。機密とは記されていない。〈モデルへの入力禁止〉。政府が統治能力に自信を持てない場所で広まり始めた、新しい表示だった。

「未登録個体は確保したのか」

「いいえ」

「国境は越えたか」

「国境ごとに答えが異なります」

「気の利いたことを言うな。その個体は枠組みを妨害できるのか」

「単独では不可能です」

大臣の表情が硬くなった。「条件付きの答えだな」

「装置は組織化されていなくても危険です。組織化された集団は装置を持たなくても危険です。分類できないシステムを備えたレプリカントが一体いることと、あらゆるレプリカントを六年で旧式と呼ぶ政府が存在することは、別々の問題です」

「君の同情など関係ない」

「同情は表明していません」

大臣が近づく。「生かして回収するよう命じたはずだ」

「命令は変わっていません」

「それで、女は？」

川村は間を置いた。「確認された目撃情報はありません」

「記録を持っているはずだ」

「可能性はあります」

「タイレルの文書は消えた。彼女にはアクセス権があった。研究は終端のない寿命へ向かっていたと聞く」

「担当者は、いずれそこへ近づくかもしれないと言ったのです。到達を実証したわけではありません」

大臣は数秒間、川村を見つめた。「君は区別に執着することで、決断を拒んでいるように思えることがある」

「区別があるからこそ、事後にも正しい決断でいられるのです」

大臣はフォルダーを閉じた。「個体を連れてこい。そして継続性ファイルの中身がわかるまで、中央モデルを近づけるな」

川村は軽く頭を下げて退出した。

廊下で森が海運窓口からの報告を持って待っていた。船は省の対象に一致する旅客身元を申告せずに PUDU を出港した。合法的な水利契約に基づく船で、目的地はクチン。三つの検査管区が捜索権を主張しているが、互いの協定を破った責任は取りたがらない。

「港へ圧力をかけますか」森が尋ねた。

「いや」

「大臣は動きを求めています」

「なら動きを見せろ。船ではなく監視員を動かせ」

森は記録した。「地元当局が乗客を特定したら？」

「乗客としては特定しない。貨物照合の例外として発見する。準備しておけ」

川村はエレベーター前で立ち止まり、振り返った。

「もう一つ。審議中、政府管区に雨を降らせるよう命じたのが誰か調べろ」

「清掃システムですが」

「違う。予定表を書き換えた者を調べるんだ」

＊　＊　＊

夜明けまでに船は、水がいっそう緑色になり、海岸線が共通の年代に合意したことのない断片で組み立てられたような海域へ入った。物流塔の向こうには森が立ち上がり、自律荷役アームと同じ水路に水上市場が浮かんでいる。古い礼拝堂は淡水化設備と護岸を分け合っていた。港の掲示にはマレー語、英語、中国語、アラビア語、それに誰も母語と主張しない機械略記が並んだ。

船長スラヤ・イドリスは二十六時間眠っていなかった。彼女はナディラに新しい通告を見せた。気に入らない答えが返ると承知のうえで意見を求めたのだ。

「港湾当局は〈貨物完全性審査〉と呼んでいます」ナディラが言った。

「メーターの誤差を知っている」

「誰かが知らせたんだ」

「いつだって知らせる人はいる」

ロイは二人の後ろにいた。「船を捜索するのか」

「まず書類を捜索する」と船長が答えた。「紙の上なら自主的な捜索に見える」

「その後は？」

「手続きをまだ信じるかどうか、決める」

隔離端末に通信が点滅した。〈証人回線四——二段階承認待ちのため面会保留〉。

船長がロイを見た。「あなた宛て？」

「かもしれない」

「役に立たない返事ね」

「今あるのはそれだけだ」

ナディラは先ほどの受領証を開き、機械印と端末の確認コードを比べた。形状は一致する。ロイの身元提示を求める指示はなかった。代わりに申請者へ、二つの行為の区別を要求していた。旧式起動治具の閲覧と、その使用の許可である。

「閲覧だけだ」とロイは言った。

ナディラがその選択を入力した。端末は受理し、細い感熱紙を吐き出した。冷えるにつれて印字がむらになって黒く沈んだ。

座標が示すのは建物ではない。現在の市の測量図では解体済みとされる埠頭だった。二行目は日没後の時刻。三行目には、二人とも予想していなかった言葉があった。

REPLACEMENT——置換。

イレーナが現れ、二度読み返した。

「何を置き換えるの？」

「埠頭とか？」ナディラが言った。

「証人かもしれない」とロイ。

彼は港を見渡した。原本とその後継を区別するために建てられた、また別の制度に近づいていた。学べば学ぶほど、誰かが善意で自分を生き延びさせたのか、確信は薄れていく。

袖の下の第七世代ポートは沈黙していた。出力の予備容量は満ちている。だが液体は、ごくわずかずつ減り続けていた。

今、船の上空を通り過ぎる警備機を撃破することも、彼には難しくなかっただろう。難しさを数値化することさえできないほどに。だからこそ何もしなかった。誰かが理由を与えるまでは、その機械に彼を攻撃する理由はない。彼はもう、正体のわからない権力の都合のために、自分の生命を切り売りするつもりはなかった。

日没後、存在しない埠頭へ向かう。すでに置き換えられたかもしれない証人に会うために。

今はまだ、彼が到着したという事実を都市自身が認めるかどうか、決めかねていた。